

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

29： 健康管理

千葉 晃央

腰にゴミ袋、右手にペーパー、 左手に消毒液で

冬が終わった。冬は体調管理の難しい季節。この季節、施設ではインフルエンザ、細菌性胃腸炎の対策として、消毒を実施する。ドアノブなど多くの人々が接する部分を終業後消毒して回る。消毒剤、ゴム手袋、キッチンペーパーを用いている。手指の消毒は玄関、食堂前、作業場出入り口前に設置し、衛生面を保っている。職員で係の者や日直が手分けして、実施をしていることが多い。

そして、この時期に受けることが多いのだが、働く職員は年1回健康診断が義務付けられている。必要に応じて、腰痛対策、メタボ対策の相談も受け付けている。今回はこういった健康管理について取り上げる。

色塗り業務

月に一回体重測定をしている。午前中の作業が終わって昼食の前に静養室で計測を行っている。体重計は1つなので着替えた人から列になって並んで順番に行っている。

計量時の服装は、普段着なので、厳密な計測というよりは目安であって、体重の増加、食事の量、健康への意識を意図している部分も多い。昼食後、計測した日は個別の「体重表」を記入する。身長、体重から理想の体重を割り出し、折れ線グラフで表している。グラフの背景を平均域であれば緑色、多い時には赤色、少ない時は黄色のバックに折れ線が書き込まれることになる。私が勤め始めたころは色鉛筆で利用者さんと塗ったり、苦手な方は職員が塗っていた。現在はプリンタなどである程度、データ化して、個別の表を作成しているが、それでもまだ手作業で色を塗ることもある。書き込む作業はし担当職員と利用者さんとふたりで一緒に書き込む。書き込みながら「たくさん食べた？」「減ってるけど体調どう？」と話しかける。食事がきちんととれているか？たくさん食べすぎていないか？など話をしながら、健康状態を確認、維持ができるよう働きかける。必要があればご家庭に連絡し、状況を確認することもある。

コンビニという誘惑

肥満傾向は、青年期以降やはり顕著である。ある施設では青色が食欲を減退するというのを聞き、休憩室のじゅうたんを青色にしている。青色はカビの色で、生き物として青色の食べ物は危ない。その認識を人間は原始の時代からの学習で身に着けていると聞いたことがある。近頃の誘惑はコンビニやスーパーである。手軽に「から揚げ」「焼き鳥」「フライドポテト」などが通勤（通所）途上で手に入る。昼間の職場での昼食のカロリー計算、自宅でのご家庭での協力による食事の管理が成り立っても、途上には働きかけられない。結局はご本人への働きかけが重要になる。

全身麻酔

そのあたり、歯科検診の後の歯磨き指導はとても分かりやすい。毎年、歯科検診を行っている。その際には歯科医師会から歯科医師が2名、歯科衛生士が2名来てくださる。歯科検診の時は皆張り切って検診に備えて日ごろにもまして歯を磨く。検診後には、利用者さんは歯磨きとコップを準備して、歯科衛生士さんが歯磨きの方法、歯磨きの必要性、口腔ケアが防ぐ病気について、大きな歯ブラシ、大きな歯並び、大きな虫歯写真、大きな歯槽膿漏、歯周病写真について伝えてくださる。特に歯周病の進行を写真で説明をされたときは、歯が抜け落ちるリスクに皆驚き、丁寧に磨こう！と決意を新たにとなる。視覚で伝える効果は素晴らしい。磨き方の指導を、みんなを受けているとその場でついつい磨きたくなくなってしまう方もおられ、食堂内の洗面所が混

雑をする。知的障害を持つ方の中には、歯科治療など医療行為を受けることが苦手な方もおられ、治療中に動かないでいることは結構難しい方もおられる。今よりひどくならないように治療が必要であること、痛みがあってもすぐ終わること、これらをご本人が想像して、承諾をして初めて治療は実施できる。時には全身麻酔で入院をして歯科治療が行われることもあるのが現実である。病院に行くというのは苦手で、何年もいっていないという方に会うこともある。時には職員と一緒にいくこともあった。そのためにはこうした医療系施設での検診等で白衣や医療行為的な状況に慣れていただくことから始まる。そして、数年通ううちに大丈夫！ということも多い。やはり同じく働く仲間が採血を受けたり、静かに検査を受けたりする姿は影響を与えている。



トリ！カラス！スズメ！

健康診断では行政の保健所に受診に行く場合と検診センターから施設に来ていただいて、即席検診センターを施設に作って行うことがある。

前者の場合は施設の立地している行政の保健センターにみんなで出かける。あらかじめ、日時、人数の予約を行い、公共の交通機関を使って出向く。一般の方も受診する中で、保健所のスタッフ、と医療機器の前に皆さんが緊張の面持ちになることもあった。

後者の場合はある施設を例にとると、朝8時台に検診センターのスタッフの方々が施設に来てくれる。到着すると静養室は心電図、園長室は医師による問診と聴力検査、会議室は採血、食堂では視力検査、トイレでは尿検査、廊下では身長と体重の測定が行われる。

視力検査では「ランドルト環 (C)」ではわかりにくい時は、鳥、犬、蝶々等のシルエットのものを使って「これは何？」と利用者さんに伺い、「とり！」等のやり取りで検診を行っている。採血が苦手な方もおられたりする。できる限り、お誘いはして、それでも難しい時には、強制はしない。後日、個人で検査を受診されることもある。尿検査では検査までに排尿しないよう声をかけたり、検診当日の朝食はなしで来ていただくこともできる限りお願いしている。検診終了後の昼食は、「おなかすいててん〜！」と数十人の方々が、一斉にとってもおいしそうに食事をされるのもいつも印象的である。

精神科医による検診も年に1回行われている。利用者ご本人への診察と、職員がケースの状況に関する相談を精神科医療の観点から助言をいただく時間をとっている。時にはその診察をきっかけに利用者さんが精神科への通院をスタートすることもある。

知っている存在

こうして過ごしていると、年に1度、毎年出会う方ができる。医療、検査スタッフ他の方々である。「去年を踏まえて、今年はこの工夫をしますね」という私達職員との会話、そして「いつもありがとう」「今年もよろしく」という利用者さんとの会話などそこにはゆるやかなつながりが生まれてくる。利用者、被検者、障害を持った人という役割だけではない関係性である。こ



うしたつながりも、ソーシャルインクルージョンを考えるならばなおさら大切にしたい。

同じような存在に行事に添乗をしてくださる旅行代理店の方もおられる。過去には金のジャケットに赤い蝶ネクタイでいつもマジックを見せてくれた方、お泊りの時には利用者さんともいっしょにお風呂に入り、

利用者さんがお風呂に入るのを一緒になって手伝ってくださった方もおられた。もちろん利用者さんたちは、毎年楽しみにしていたし、とても人気があった方で今でも忘れることはない。食堂で調理を担当して下さっている方も同じような存在でいてくださる。

世間にあるサービスを多くの方々と一緒に利用をすることも、より多くの方に社会的弱者の問題や障害者問題を考えてもらう大切な機会と考えている。

特別支援…、個別支援…、専門家による…という言葉で、世間一般とは隔絶されたものになり、結局「社会的排除」になっていないか？という思いが頭をよぎることも多い。

BACK ISSUES

- 音28 2017年3月
- 救世主になりたい援助職27 2016年12月
- 事件について26 2016年9月
- クルマ社会と福祉政策25 2016年6月
- 施設が求める「障害者像」はあるのか？24
2016年3月
- 連絡帳23 2015年12月
- におい22 2015年9月
- 作業着21 2015年6月
- 食べる20 2015年3月
- 通勤19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力17 2014年6月
- 触れる16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月
- 情報の格差15 2013年12月
- 20年前のノートから14 2013年9月
- そうじのねらい13 2013年6月
- 個別化の暗部12 2013年3月
- グループワークの視点11 2012年12月
- 実習生がやってきた！10 2012年9月
- 月曜日のせいやな9 2012年6月
- 所得を決める福祉職？8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会
2011年9月
- 旅行がない！5 2011年6月
- 職員の脳内回路4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ3
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に！？1 2010年6月